

## 28. 結核とサナトリウム文学

# 医事万華鏡

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、呼吸器感染症に対する人々の関心も高まっていますが、同じく呼吸器感染症の代表である「結核」の存在は忘れられがちなようです。確かに、医療水準や衛生環境の向上に伴い、結核は早期発見や治療が可能な疾患になりましたが、年間2万人程度の新規発症患者が報告されており、いまだに日本の主要な呼吸器感染症のひとつであるからです。

ところで結核は19世紀後半から20世紀前半の日本において、肺・気管支炎や胃腸炎と並んで3大死因のひとつでした。また、結核予防会が設立された1939年（昭和14年）当時、結核は死因第1位の国民病であり「治療法のない死病」と恐れられていました。死亡者数も15万人を超え、20代を中心とした若者が中心でした。

そんな背景からひとつの文学ジャンルが生まれました。結核に冒された人々の生活を描いたサナトリウム文学です。堀辰雄（1904—1953）の有名な『風立ちぬ』（1936）はその代表的な作品であり、私自身も青年期に読み耽ったことを覚えています。堀辰雄は『風立ちぬ』に加えて『美しい村』『菜穂子』と軽井沢を舞台にした作品を残しており、

軽井沢の追分には彼の文学記念館もあります。5月の半ばから6月にかけて一年で一番美しい時期と言われる今の時期の軽井沢に、ふと訪ねてみたくなりました。

さて、『風立ちぬ』は死を迎えゆく若い男女の、残された日々 of 静謐な生活を描いたものです。Paul Valéryの『海辺の墓地』からの引用句である「風立ちぬ、いざ生きめやも」は、不安な風の騒めきに「何とか生きてみよう」という思いの発露を表しているようで、本書に独特な美しい響きと彩りを添えています。19歳の時に結核を発病して以来、病巣を抱えたまま学業を続けつつ作家活動に入っていた堀辰雄が、重い結核患者の婚約者に付添いながら信州のサナトリウムで過ごした数カ月の経験を基に作られたとされていますが、婚約者はサナトリウムに入ってから半年で亡くなり、作者の堀辰雄は48歳で結核死しています。

そんな結核は、堀辰雄以外にも多くの優れた若い文学者らの命を奪ってきました。石川啄木、樋口一葉、正岡子規、立原道造、高山樗牛、国木田独步、長塚節、梶井基次郎、中原中也、滝廉太郎、竹久夢二などもそうです。

コロナ禍で忘れられがちな結核という病。書棚の一隅にある『風立ちぬ』は、私に改めて結核を侮ってはいけないと教えてくれるのです。

（JMS主幹・野村元久）

